坂出・綾歌支部国語部会

坂綾・白峰中　五　百　森　晶　子

1　研究主題

「生きて働く力を育む国語教育～言葉による見方・考え方を働かせて深める指導と評価～」

2　研究の進め方

研究を参観して討議したり、国語教育の喫緊の課題について各校の取り組みを基に協議したりする。

(1)　５月１日

研究組織決定、研究主題の決定、研究活動の計画

(2)　６月６日　東部中

全国大会参加報告､新教材の授業研究､評価について課題の協議

(3)　９月３０日　綾川中

研究授業、授業討議、実践発表、Ｒ９年度に向けて研究の方向性の確認・討議

3　研究内容

(1)　第１回研修会（坂出市立東部中学校)

①　全国大会参加報告

松浦　雛乃　教諭

（三豊市立三野津中学校)

昨年度11月に開催された第53回全日本中学校国語教育研究協議会（神奈川大会）に参加した松浦先生より大会の報告があった。大会では主として「生徒を主語にした授業づくり」、「主体的・対話的で深い学びの実現」についての提案があった。「生徒を主語にした授業づくり」では「学びのプラン」という生徒自身が用いる単元の授業計画を用いて、指導と評価の一体化を目指しており、「学びのプラン」の具体例の紹介があった。また、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けて、神奈川県では単元内で「個の学び」と「集団での学び」を往来し、単元終末部で「個の学びを深める振り返り」の時間を設定するという単元モデルに沿って、授業が構想されているということであった。

②　新教材の教材研究

本年度教科書に新たに掲載された教材の分析、授業づくり（１年「私たちの未来」、２年「足跡」、３年「受け取る『利他』」）を学年ごとに行った。これらの教材を用いて、授業の中で生徒らにどのような力をつけたいか、生徒のどのような姿を目指すかといったイメージをグループ内で共有し、単元の流れや言語活動について協議することができた。

【新教材について討議する様子】

③　評価について

各学校の評価の状況について、資料をもとに情報交換を行った。単元終末部で行った言語活動（スピーチや意見文等）をどのように評価するか、評価の基準についてはどのように設定し、生徒に示しているかなどの紹介があった。討議の中で大きく議題として挙がったのが生徒の最終意見文や、振り返り等、長い文章をどのように評価するかというものであった。授業者が単元の目標を明確にするとともに、単元の中で身に付けてほしい力、めざす生徒の姿を具体的な文言で基準として示すことも必要であると感じた。

(2)　研究授業

①　題材「おくのほそ道」（３年）

②　授業者　川田　蘭　教諭
　（綾川町立綾川中学校）

③　本時の目標

序段を読み、「旅」に対する芭蕉の考え方と自分の考え方を比較し、これまでの学習を踏まえて芭蕉が旅に出た理由を考えることができる。

④　学習指導課程

ア　前時までの学習を振り返る。

イ　学習課題「芭蕉はなぜ旅に出たのだろうか」を共有する。

ウ　序段の前半部分を読み、芭蕉の「旅」についての考え方をまとめる。

エ　序段の後半部分を読み、再度自分たちの旅行と芭蕉の旅への考え方を比較する。

オ　芭蕉はなぜ旅に出たのかを考える。

カ　本時のまとめをし、本時の学習を振り返る。

⑤　研究討議

ア　授業説明

・　古典が苦手な生徒が多い。そこで、古典を身近なものに捉え直すために、自分の旅行と芭蕉の旅を比較させた。

・　芭蕉が旅に出た理由について資料を使って説明させた。資料を選択し、調べ学習を中心に授業展開することで、個々の生徒が自主的に学習に取り組めるようにした。

【資料を選択している様子】

イ　授業討議

・　生徒がさまざまな資料を選択して自分の意見の参考にしたり、オクリンクで送られた意見にスタンプで反応したりする方法は個別最適化が図られ、生徒も意欲的に活動できていた。

・　芭蕉が旅に出た理由を考えさせるために、あえて「平泉」を最初に学習したので、その既習内容を十分生かせるような展開があればさらによかった。

⑦　指導助言　大林　克暢　校長
　（宇多津町立宇多津中学校）

・　生徒が「選択・判断」できる資料については、課題について深く考えられるとともにどれも選びたくなるような魅力ある資料を提示すると、生徒の葛藤が生まれ､対話も深まる。

・　「平泉」から「序段」に戻る学習計画については、指導目的に基づいて、よりよい順番を考えていくことは今後も大切である。

・　オクリンクで生徒が提示した意見を構造的に板書したり、意見の交流を図ったりすることで、さらに思考が深まるであろう。

4　反省と課題

生徒の知的好奇心が働くような学習課題、実生活に密着した場面設定などの工夫、充実した言語活動ができる教材提示、個別先的な学びを実現する学習指導課程の工夫など一層の研究の必要性を実感した。

また､「言葉による見方・考え方を働かせて深める指導と評価」については、今回、生徒のワークシートを使って各校で評価の在り方を考えた。評価の観点を明確にし、評価基準の研修を今後も進めていきたい。さらに、新たな観点別評価として「知識・技能」と「思考・判断・表現」の２観点になることも踏まえて、何を評価材料にするか研修を積んでいきたい。